ベトナムにおける「二十四孝別集」をめぐって

佐 藤 トゥイウェン

Survey on「二十四孝原編」in Vietnam

SATO Thuy Uyen

「二十四孝別集」(a printed book) was included in『四十八孝詩画全集』, which was edited in 1867 by Dang Huy Tru (鄧輝燴).「二十四孝別集」is now in the possession of the Hanoi Sino-Nom Research Institute. There is only one literature which is related to「二十四孝別集」in Vietnam. So, we can say that this must be an important literature. However, until now there has been virtually no research done in Vietnam on「二十四孝別集」. This paper will compare the「二十四孝別集」(included in『四十八孝詩画全集』) in Vietnam with the「二十四孝別集」(carried in『三餘堂叢刻』) and the「二十四孝別録」(included in『前後孝行録』) of China to clarify its reception, diffusion and transformation in Vietnam. We point out that「二十四孝別集」(carried in『三餘堂叢刻』) is the original manuscript of the「二十四孝別集」(included in『四十八孝詩画全集』). However, compared with「二十四孝別集」(carried in『三餘堂叢刻』), there were some modifications and some parts was omitted, furthermore, putting Dang Huy Tru (鄧輝燴)'s own「七言絶句」poem into the「二十四孝別集」(included in『四十八孝詩画全集』) of Vietnam. So we can say that「二十四孝別集」(included in『四十八孝詩画全集』) of Vietnam was not regarded as the original manuscript of China. Moreover, this is the point reveals characteristic features of Vietnamese style.

キーワード：二十四孝別集、鄧輝燴、四十八孝詩画全集、ベトナムの「二十四孝」
Nhị thập tứ hiếu biệt tập, Đặng Huy Trứ, Tứ thập bát hiếu thi họa toàn tập,
Nhị thập tứ hiếu Việt Nam

はじめに

ベトナムにおける「二十四孝」説話関係の文献は、李文馥系の「二十四孝」と李文馥系以外の「二十四孝」に分けられる。また、ベトナムにおける「二十四孝」説話は『日記故事』系統に属するものであるが[1)]、『日記故事』系統の「二十四孝」説話以外に「二十四孝別集」が伝播したことが知られている。ベトナムにおける「二十四孝別集」は『四十八孝詩画全集』(以下、『全集』と略称) に収録され、漢喃研

1) ベトナムにおける「二十四孝」説話の系統については、佐藤トゥイウェン「李文馥系の「二十四孝」と『日記故事』」、『東アジア文化交渉研究』第7号、関西大学大学院東アジア文化研究科、2014年3月を参照されたい。

究院所蔵の一部しか確認できないため、貴重な文献であるといえる。『全集』は、鄧輝熺によって中国の朱文公「二十四孝原編」、高月槎「二十四孝別集」を参考にして編纂され、嗣德丁卯年（1867）に出版された漢文の刊本である。『全集』所収の「二十四孝原編」についての論考は昨年、『東西学術研究所紀要』第48輯に掲載した[2]ため、本稿ではベトナムにおける「二十四孝別集」を中心に考察したいと考えている。

筆者は高月槎の「二十四孝」に関する文献を二冊確認している。『三餘堂叢刻』本（以下、『叢刻』と略称）に収められている「二十四孝別集」、および『前後孝行録』本（以下、『前後』と略称）所収の「二十四孝別録」である。これらは書名が異なっているが、もとの「二十四孝」説話とは別の二十四の孝行譚を収めたもので、孝子名、および孝子の順序は互いに一致する。『叢刻』は、黒田彰氏によれば、浙江省鄞県の古書肆であった林仕荷（彬甫）の蒐集にかかる旧書、十二種十七巻を叢刻し、民国十六年（1927）に刊行したものである。現在見ることのできる「二十四孝別集」は、『叢刻』所収本のみで、目下のところ、『叢刻』所収本よりも古い「二十四孝別集」は見あたらないという[3]。また『前後』本所収の「二十四孝別録」は、道光二年（1822年）のものの影印本と推測できる[4]。

本稿では、『全集』本所収の「二十四孝別集」が『叢刻』本所収の「二十四孝別集」および『前後』所収の「二十四孝別録」のうち、どの文献を参考にして再編されたのか、そして、『全集』所収の「二十四孝別集」の本文と図版を上記の『叢刻』本所収の「二十四孝別集」、『前後』本所収の「二十四孝別録」と文献学的に比較し、ベトナムにおける「二十四孝別集」の受容、変遷を明らかにしたい。

一．作者の履歴

鄧輝熺（ダン・フィ・チュー、Đặng Huy Trứ）の経歴については先の論文[5]で言及したため、ここでは省略する。

二．『四十八孝詩画全集』の形態

1．作品の誕生の背景および創作の動機

本作品の誕生の背景および創作の動機は、「四十八孝詩畫全集序」に明記されている。そこに、

夫孝者天之經也、地之義也、民之行也。一孝立而萬善從矣。歴觀前古上自天子下達庶人、以孝德

2）ベトナムにおける「二十四孝原編」については佐藤トゥイウェン「鄧輝熺とベトナムにおける「二十四孝原編」」、『東西学術研究所紀要』第48輯、関西大学東西学術研究所、2015年4月を参照されたい。

3）黒田彰『孝子伝の研究』佛教大学鷹陵文化叢書5（思文閣出版、2001年）、400～401頁。

4）『前後孝行録』本の刊行年代については、注1前掲、佐藤トゥイウェン「李文馥系の「二十四孝」と『日記故事』」、『東アジア文化交渉研究』第7号を参照されたい。

5）注2前掲、佐藤トゥイウェン「鄧輝熺とベトナムにおける「二十四孝原編」」、『東西学術研究所紀要』第48輯を参照されたい。

顯者。播在丹青非一筆□□□[6] 也。丁巳春余試和榮得李文禎□□前後二十四孝詩畫、心甚悅焉、取而題以詩將使童習者、因事以得詩、且因詩以得畫也。後其詩登草、畫遂不傳。夫感応人心固莫善乎詩而啓發童蒙尤莫善乎畫、蓋童性多好畫、因其好而導之以趨於善是亦教兒嬰孩之一術也。然則四十八孝有詩矣、可無畫乎歳之夏復如東得善畫者。圖其事跡於詩之左、因別爲集、顔曰四十八孝詩畫、廼壽之梨棗、以不朽、他日兒孫傳習、畫以養其目、詩以養其心、而秉彝好德之良、偶於嬉戯間、油然以生孩提而愛、五十而慕、且能立身楊名以顯其父母、是集亦小補云。嗣德萬萬年之二十歳丁卯冬十月既望欽　派如東公幹　誥授中順大夫鴻臚寺卿辦理戸部事務丁未科觧元望津醒齋黄中子鄧氏輝燴書於廣東河南長庚寓舍之東窗[7]。

とある。

ここに記されているとおり、鄧輝燴は嗣德丁巳（1857年）に李文禎から「前後二十四孝詩画」を得て、心から悦んだ。「前後二十四孝詩画」には詩と画を載せており、詩は心を、画は目を養う。児童は画を好むから、児童に人としての道を守り行うよう教育すべく本書を撰述したという。これまで述べたように、阮朝は「孝」教育の実施や「孝」の勧奨を重視していたため、鄧輝燴が本書を編纂したのは自然な流れであった。

2．著作年代

『全集』の扉の右側には「嗣德丁卯冬新鐫」とあり、中央には「四十八孝詩画全集」という書名が大字で記され、左側には「鄧黄中家草」とある（図１参照）。

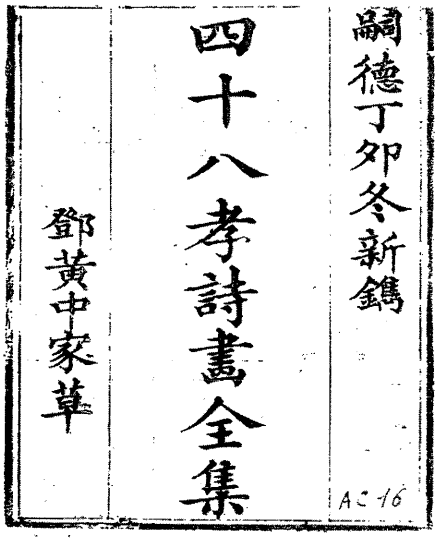


図１　『四十八孝詩画全集』扉

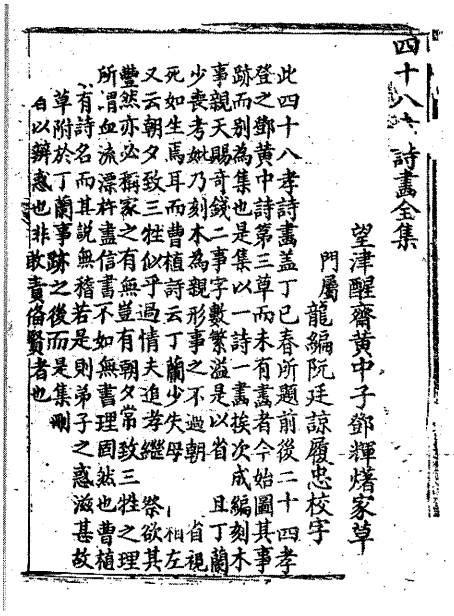


図２　『四十八孝詩画全集』第６葉表

6）□は欠字（１字分）で示す。

7）ハノイ漢喃研究院蔵『四十八孝詩画全集』（AC. 16）、第１葉表裏、第２葉表裏。

また、冒頭の「四十八孝詩画全集序」には「嗣徳萬萬年之二十歳丁卯冬十月既望欽　派如東公幹　誥授中順大夫鴻臚寺卿辦理戸部事務丁未科觧元望津醒齋黄中子鄧氏輝熺書於廣東河南長庚寓舍之東窗」とあり、巻頭右側には「望津醒齋黄中子鄧輝熺家草」、「門屬　龍編阮廷諒履忠校字」とある（図２参照）。

ここから、『全集』は鄧輝熺、字黄中、号望津、醒斎によって中国の広東省河南長庚寓舎で序が書かれ、阮廷諒によって校正されたのち、嗣徳二十年丁卯冬十月、すなわち1867年旧暦10月に刊行されたことがわかる。

３．文献の構成

本書は全55葉の刊本で、高さ28センチ、幅19センチ。内容は、二つの序（「四十八孝詩画全集序」、「詠前後二十四孝原序」）、「二十四孝原編」、「二十四孝別集」の順序で構成されている。また、各説話には「孝感動天」などの四文字の標題がつき、説話の本文が続く。また各説話の終わりでは、原本の「五言絶句」を鄧輝熺の自作の「七言絶句」の詩に代えている。標題の下には双行注があり、上平聲〔一東韻〕から〔十二文韻〕まで、下平聲〔一先韻〕から〔十二侵韻〕までが記されている。また「二十四孝原編」の第一説話（大舜）、および「二十四孝別集」の第一説話（文王）の場合のみ他の説話と異なり、標題下の双行注に「以下朱文公前二十四孝原編」、「以下高月槎先生後二十四孝別集」と加えられている。全体の構成としては、見開きの右側に本文、左側に画がある。版心には縦書きで「寢門三朝」などの標題が記されている。（図３、図４参照）。

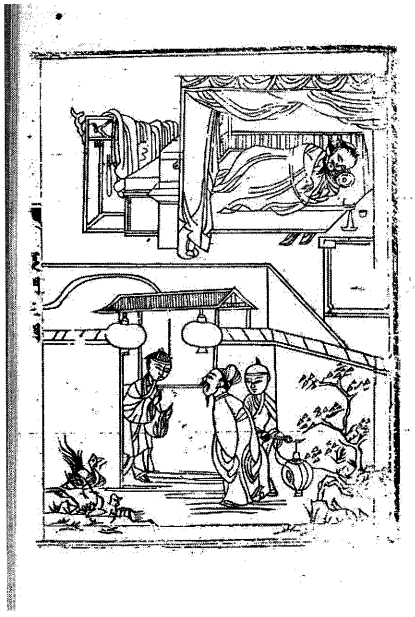


図３『四十八孝詩画全集』第31葉表

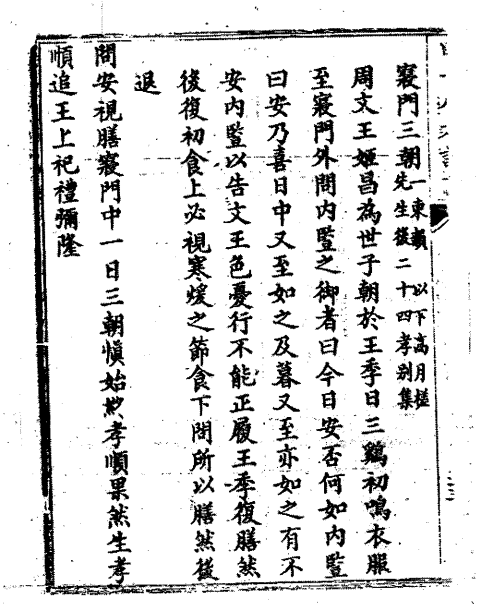

寢門三朝（東瀛先生後二十四孝別集以下高月槎）
周文王姬昌為世子朝於王季日三鷄初鳴衣服
至寢門外問内豎之御者曰今日安否何如内豎
曰安乃喜日中又至如之及暮又至亦如之有不
安内豎以告文王色憂行不能正履王季復膳然
後復初食上必視寒煖之節食下問所以膳然後
退
問安視膳寢門中一日三朝愼始終孝順果然生孝
順追王上祀禮彌隆

図４『四十八孝詩画全集』第30葉裏

三．『四十八孝詩画全集』所収の「二十四孝別集」と中国の「二十四孝別集」の比較

１．孝子の順序の考察

まず、『全集』本の説話の順序を『叢刻』本と『前後』本と比較して考察してみる。

文献 順序	「二十四孝別集」 （『全集』所収）	「二十四孝別集」 （『叢刻』所収）	「二十四孝別録」 （『前後』所収）
1	寝門三朝（文王）[8]	寝門三朝（文王）	寝門三朝（文王）
2	投江覓父（曹娥）	投江覓父（曹娥）	投江覓父（曹娥）
3	鳥助成墳（顔鳥）	鳥助成墳（顔鳥）	鳥助成墳（顔鳥）
4	血刃仇人（趙娥）	血刃仇人（趙娥）	血刃仇人（趙娥）
5	鶏不供客（茅容）	鶏不供客（茅容）	鶏不供客（茅容）
6	圖像公庭（李餘）	圖像公庭（李餘）	圖像公庭（李餘）
7	鄰里羅社（王脩）	鄰里羅社（王脩）	鄰里羅社（王脩）
8	讓兄感母（王覽）	讓兄感母（王覽）	讓兄感母（王覽）
9	少違酒約（陶侃）	少違酒約（陶侃）	少違酒約（陶侃）
10	聞耕輟誦（趙景真）	聞耕輟誦（趙景真）	聞耕輟誦（趙景真）
11	使客敬母（裴秀）	使客敬母（裴秀）	使客敬母（裴秀）
12	受杖感親（韓伯兪）	受杖感親（韓伯兪）	受杖感親（韓伯兪）
13	夢遇慈親（王鏗）	夢遇慈親（王鏗）	夢遇慈親（王鏗）
14	代父從征（花木蘭）	代父從征（花木蘭）	代父從征（花木蘭）
15	母病不乳（許法稹）	母病不乳（許法稹）	母病不乳（許法稹）
16	滴血認骸（王少元）	滴血認骸（王少元）	滴血認骸（王少元）
17	登第不仕（包拯）	登第不仕（包拯）	登第不仕（包拯）
18	幼通孝経（朱文公）	幼通孝経（朱文公）	幼通孝経（朱文公）
19	朝服侍立（王溥）	朝服侍立（王溥）	朝服侍立（王溥）
20	叱木成馬（崔人勇）	叱木成馬（崔人勇）	叱木成馬（崔人勇）
21	天賜奇錢（呉氏）	天賜奇錢（呉氏）	天賜奇錢（呉氏）
22	踐地避石（徐積）	踐地避石（徐積）	踐地避石（徐積）
23	伏柩滅火（祝公榮）	伏柩滅火（祝公榮）	伏柩滅火（祝公榮）
24	私祭木主（楊士奇）	私祭木主（楊士奇）	私祭木主（楊士奇）

このように、三つの文献とも孝子の順序は一致している。しかしこれは、「二十四孝」説話の三系統とはまったく違うものである。つまり、「二十四孝別集」その他は三系統には属さないもう一つの二十四孝説話なのである。

2．本文の比較

文献の構成については、『全集』本所収の「二十四孝別集」は本文を先に置き、見開きの左頁に図版を入れている。『全集』本では、「寝門三朝」などの四文字の標題があり、その後に、「一東韻　以下高月槎先生後二十四孝別集」、「二冬韻」などの双行注があるが、『叢刻』本には双行注がない。一方、『前後』本には標題および双行注がない。そして、上述した通り、「二十四孝原編」と同様、『全集』本所収の「二十四孝別集」では原本の「五言絶句」を鄧輝燿自作の「七言絶句」の詩に代えていること、および避諱のため、文字の省略、文字の改変、欠筆という三つの書き方を用いている。避諱の文字は、具体的には以下の表のとおりである。

8）（　　）内は筆者が補ったものである。

『三餘堂叢刻』	『前後孝行録』	『全集』	避諱の方法
時	時	「時」[9] を省略する。 「世」 「名」 「辰」 「人」	諱の文字を省略する。（第一文王の説話） 別の文字に改変。（第七王脩の説話） 別の文字に改変。（第八王覽の説話） 別の文字に改変。（第九陶侃の説話、第十趙景真の説話、第十三王鏗の説話、第十四花木蘭の説話、第十五許法稹の説話、第十六王少元の説話、第二十四楊士奇の説話） 別の文字に改変。（第十五許法稹の説話）
宗	宗	「尊」[10]	別の文字に改変。（第五茅容の説話、第十七包拯の説話）
洪	洪	「洪」[11]	欠筆。（第九陶侃の説話）
華	華	「華」[12]	欠筆。（第二十四楊士奇の説話）

全体として、『全集』本では『叢刻』本と類似している説話が『前後』本より多いため、『全集』本は『叢刻』本を参考にして再編されているといえる。しかし、細かく考察すると、語釈、省略、避諱などの差異があるため、以下、各説話ごとにとりあげて比較検証してみたい。

9）「時」は嗣徳帝の名である「阮福瑭」の諱の「瑭」と同音の文字である。そのため、諱を避けるため、「時」を省略したり、別の文字に改めたりする。このことは『欽定大南会典事例』に、「紹治七年十月日、議奏恭照　御名字臨文改用臨讀避音人名地名不得用冒該三字〔一字左從日右從寺改用序、字上從**𠀋**下從日同、又如寺刻之類照隨文義通暢凡係應改之字其義甚廣名以例推……〕。偏旁諸字臨文改用、人名地名仍不得冒用三十一字〔一字上艹頭左從日右從寺、一字左從氵中從日右從寺、一字左從魚中從日右從寺、一字左從土中從日右從寺……〕」とある。阮朝国史館『欽定大南会典事例』（天理大学図書館所蔵）巻百二十一、第14葉裏以下を参照。

10）「綿宗」は紹治の字であり、「宗」を避けるため、「尊」に改めている。紹治元年の諱の勅令には欠筆して「**宗**」としているが、紹治二年には通常の文章では「宗」を「尊」に改めるよう命じた。このことについて、『大南寔録』には「辛丑紹治元年、禮部議上國諱諸尊字〔一臨文改用、臨讀避音、人名地名不得冒用、凡三字、左從日中從方右從定、上從日左從鬲右從虫、上從宀下從示〕……」、「小字臨文稱呼惟禁不得連用、若單用**宗**字、凡於郊廟者著照樣直書餘職制、及臨文應用者著省一畫、臨讀者應稱為尊字亦足**昭**敬重。……壬寅紹治二年、列廟徽號與玉牒、寔録中遇有應書人名、及臨文如有恭遇列聖徽號、亦準各敬缺一筆、至如臨文如係南国及北朝前代帝王廟號竝一切常用文字、準各隨文義或改為尊字、或別字者毋得仍前省畫餘依議行」とある。阮朝国史館『大南寔録』正編、「大南寔録十三」第三紀（慶応義塾大学言語文化研究所、1977年）巻四63頁、巻二十六366頁を参照。〔　〕内は双行注である。

11）「**洪**」は、嗣徳帝の字である「洪任」の「洪」を避けるため、欠筆となっている。このことについては、『欽定大南会典事例』に「其朕小字〔左從氵右從共　左從亻右從壬〕與偏旁諸字臨文均準其行用、仍不得連用〔左從氵右從共左從亻右從壬〕二字再各遜一畫足**昭**敬重。毋須改用別字。但臨讀避音與人名地名不得昌用、以合禮意」とある。〔　〕内は双行注。阮朝国史館『欽定大南会典事例』（天理大学図書館所蔵）巻百二十一、第16葉裏を参照。

12）「**華**」は紹治帝の母親の名である「華」の諱を避けるため、欠筆となっている。このことについては、『欽定大南会典事例』に「紹治元年議奏恭照、臨文加巛頭臨讀避音、人名地名不得冒用二字〔一字上從𠀋下從十、一字上從宀下從貫〕」、「……四年議準向例凡臨文恭遇。廟諱、一字上從玉右從當、一字上從宀下從貫、一字上從𠀋下從十、與一字左從日右從侖、該四字均奉加樣而字體。仍然恐未足以**昭**尊敬、茲請這四字竝原加樣、諸字臨文各缺一筆」とある。〔　〕内は双行注。阮朝国史館『欽定大南会典事例』（天理大学図書館所蔵）巻百二十一、第4葉表、第十七表を参照。

1．文王	
全集	寝門三朝〔一東韻　以下高月槎先生後二十四孝別集〕[13] 周文王姫昌、為世子、朝於王李、日三、鶏初鳴衣服、至寝門外、問内豎之御者曰、今日安否、何如、内豎曰安、乃喜、日中又至、如之、及暮又至、亦如之、有不安、内豎以告、文王色憂、行不能正履、王李復膳、然後復初、食上必視寒煖之節、食下問所以膳、然後退。 問安視膳寝門中　　一日三朝愼始終 孝順果然生孝順　　追王上祀禮彌隆
叢刻	寝門三朝 周文王姫昌、為世子時、朝於王李、日三、雞初鳴而衣服、至於寝門外、問内豎之御者曰、今日安否、何如、内豎曰安。文王乃喜、及日中又至、亦如之、及暮又至、亦如之。其有不安節、則内豎以告、文王色憂、行不能正履、王李復膳、然後亦復初、食上必視寒煖之節、食下問所以膳、命膳宰曰、末有原應曰諾、然後退。 自聽雞鳴起　　三番到寝門 問安兼視膳　　竭力奉晨昏
前後	周文王姫昌、為世子時、朝於王李、日三、雞初鳴而衣服、至於寝門外、問内豎之御者曰、今日安否、何如、内豎曰安。文王乃喜、及日中又至、亦如之、及暮又至、亦如之、其有不安節、則内豎以告、文王色憂、行不能正履、王李復膳、然後亦復初、食上必視寒煖之節、食下問所以膳、命膳宰曰、末有原應曰諾、然後退。 自聽雞鳴起　　三番到寝門 問安兼視膳　　竭力奉晨昏

『全集』本には「為世子朝於王李」、「鶏初鳴衣服至寝門外」、「乃喜、日中又至、如之」、「有不安、内豎以告」、「然後復初」とあるが、『叢刻』本と『前後』本では、「為世子時朝於王李」、「雞初鳴而衣服至於寝門外」、「文王乃喜、及日中又至、亦如之」、「其有不安節則内豎以告」、「然後亦復初」としている。また『叢刻』本、『前後』本には「命膳宰曰、末有原應曰諾」とあるが、『全書』本にはそれがない。

2．曹娥	
全集	投江覓父〔二冬韻〕 漢曹娥、上虞人、曹旰之女。旰為巫祝、能撫節按歌、以悦神、五月五日、逆流而上為水所淹。娥年十四歳、沿江號泣、投瓜於江、祝曰、父屍所在、瓜當沈。旬有七日至一處、瓜沈、遂投水、經五日、負父屍出、顔色如生、邑人為立曹娥孝女廟。 投瓜赴水自從容　　得父屍來色尚濃 邑廟千秋傳孝女　　長江滾滾月溶溶
叢刻	投江覓父 漢曹娥、上虞人、曹旰之女、旰為巫祝、能撫節按歌、以悦神、五月五日、逆流而上為水所淹、屍不能得、娥年十四歳、沿江號泣、既而投瓜於江、祝曰、父屍所在、瓜當沈、旬有七日至一處、瓜沈、遂投水、經五日、負父屍出、顔色如生、邑人為立曹娥孝女廟。 父溺屍難覓　　投瓜赴急流 巍巍江上廟　　千載孝名留
前後	漢曹娥、上虞人、曹旰之女、旰為巫祝、能撫節按歌、以悦神、五月五日、逆流而上為水所淹、屍不能得、娥年十四歳、沿江號泣、既而投瓜於江、祝曰、父屍所在、瓜當沈、旬有七日至一處、瓜沈、遂投水、經五日、負父屍出、顔色如生、邑人為立曹娥孝女廟。 父溺屍難覓　　投瓜赴急流 巍巍江上廟　　千載孝名留

13)〔　〕内は双行注。

『全集』本には「投瓜於江」とあるが、『叢刻』本と『前後』本では「既而投瓜於江」とする。『叢刻』本、『前後』本には「屍不能得」とあるが、『全書』本にはそれがない。

3．顔鳥	
全集	鳥助成墳〔三江韻〕 漢顔鳥、會稽人業漁樵、毎忍饑以養父、父亡、無力營葬、乃負土築墳、羣鳥銜土助之、其吻皆傷、遂名其縣曰義鳥。 日日樵柯又釣矼　　忍饑養父世無雙 築墳乍見鳥相助　　孝感當年衆共聡 〔許江切目視也古句傾城傾市衆所聡〕
叢刻	鳥助成墳 漢顔鳥、會稽人、業漁樵、毎忍饑以養父、父亡、無力營葬、乃負土築墳、羣鳥銜土助之、其吻皆傷、遂名其縣曰義鳥。 無力營窀穸　　孤身負土勤 義鳥能感召　　千百助成墳
前後	漢顔鳥、會稽人、業漁樵、毎忍饑以養父、父亡、無力營葬、乃負土築墳、羣鳥銜土助之、其吻皆傷、遂名其縣曰義鳥。 無力營窀穸　　孤身負土勤 義鳥能感召　　千百助成墳

『全集』本は『叢刻』本、『前後』本と全く同文である。

4．趙娥	
全集	血刃仇人〔四支韻〕 漢趙娥、父安為同縣人李壽所殺、娥兄弟三人、俱病死、讐喜、以為莫已報也、娥潛備刃伺之、積十餘年、遇於都亭、刺殺之刃其頭、詣縣曰、父讐報矣、請受、戮縣義之、欲釋、娥不肯曰、何敢苟生、以枉公法、自入獄遇赦免。 父仇鬱結十餘朞　　血刃都亭屬女兒 就獄欣然無枉法　　一朝鮮雨沛恩施
叢刻	血刃仇人 漢趙娥、父安為同縣人李壽所殺、娥兄弟三人、俱病死、讎喜、以為莫已報也、娥潛備刃伺之、積十餘年、遇於都亭、刺殺之刃其頭、詣縣曰、父讎報矣、請受、戮縣義之、欲釋、娥不肯曰、何敢苟生、以枉公法、自入獄遇赦免。 父殺諸昆死　　閨中賸女兒 狂讎且莫喜　　備刃正相隨
前後	漢趙娥、父安為同縣人李壽所殺、娥兄弟三人、俱病死、讎喜、以為莫已報也、娥潛備刃伺之、積十餘年、遇於都亭、刺殺之刃其頭、詣縣曰、父讎報矣、請受、戮縣義之、欲釋、娥不肯曰、何敢苟生、以枉公法、自入獄遇赦免。 父殺諸昆死　　閨中賸女兒 狂讐且莫喜　　備刃正相隨

『全集』本は『叢刻』本、『前後』本とほぼ一致する。

5．茅容	
全集	鶏不供客〔五微韻〕 漢茅容、與郭林尊交最篤、□□過訪、寓宿、旦日殺鶏為饌、□□□為為已設也。少頃容進而供母、自携□□□□□、林尊喜曰、得友如此、足以教孝足以成徳。 烹鶏専為奉慈幃　　對客懽然飽蕨薇 益友斯人堪勸孝　　勉將寸草報春暉
叢刻	雞不供客 漢茅容、字李偉、與郭林宗交最篤、林宗過訪、寓宿、旦日殺雞為饌、林宗以為為已設也、少頃容進而供母、自携野蔬與客飯、林宗喜曰、得友如此、足以教孝足以成徳。 甘旨貧家薄　　烹雞勸母餐 園蔬同客飽　　麤糲有餘歡
前後	漢茅容、字李偉、與郭林宗交最篤、林宗過訪、寓宿、旦日殺雞為饌、林宗以為為已設也、少頃容進而供母、自携野蔬與客飯、林宗喜曰、得友如此、足以教孝足以成徳。 甘旨貧家薄　　烹雞勸母餐 園蔬同客飽　　麤糲有餘歡

『全集』本の標題には「鶏不供客」とあるが、『叢刻』本には「雞不供客」とある（鶏と雞は異体字）。『全集』本の本文には「林尊」とあるが、『叢刻』本、『前後』本では「林宗」となっている。『全集』本は避諱により、「宗」を「尊」に改めている。

6．李餘	
全集	圖像公庭〔六魚韻〕 蜀漢李餘、涪城人、年十三父殺人出亡、母下吏餘乞代死、官以為人所使也、不許遂自殺、事聞、詔圖像、懸郡縣廷、以勵風俗。 母為夫逃下吏餘　　緹縈故事壅宸居 殺身年僅十三歳　　圖像懸懃下詔書
叢刻	圖像公廷 蜀漢李餘、涪城人、年十三父殺人出亡、母下吏餘乞代死、官以為人所使也、不許遂自殺、事聞、詔圖像、懸羣縣廷、以勵風俗。 代親終不許　　難訴九重天 慈母如遭戮　　兒先赴冥泉
前後	蜀漢李餘、涪城人、年十三父殺人出亡、母下吏餘乞代死、官以為人所使也、不許遂自殺、事聞、詔圖像、懸郡縣廷、以勵風俗。 代親終不許　　難訴九重天 慈母如遭戮　　兒先赴冥泉

『全集』本は『叢刻』本、『前後』本と同文である。

7．王脩	
全集	鄰里罷社〔七虞韻〕 三国世、魏王脩、年七歳喪母、母於社日亡、新年鄰人舉社、烹羊酌酒、歡笑之聲、徹戸外、脩感念母亡、悲號悽惋、鄰人為之罷社。 羊酒歡聲滿市衢　　慕萱情切獨號呼 悲聲竦動人同慨　　從此鄉鄰罷祭楡
叢刻	鄰里罷社 三国時、魏王脩、年七歳喪母、母於社日亡、明年鄰人舉社、烹羊酌酒、歡笑之聲、徹戸外、脩感念母亡、悲啼悽惋、鄰人聞之、為之罷社。 哀意感鄰里　　紛紛罷社歸 遙看桑柘影　　不覺涙交揮
前後	三国時、魏王脩、年七歳喪母、母於社日亡、明年鄰人舉社、烹羊酌酒、歡笑之聲、徹戸外、脩感念母亡、悲啼悽惋、鄰人聞之、為之罷社。 哀意感鄰里　　紛紛罷社歸 遙看桑柘影　　不覺涙交揮

『全集』本には「三国世」、「新年」、「悲號」、「鄰人為之罷社」とあるが、『叢刻』本、『前後』本では「三国時」、「明年」、「悲啼」、「鄰人聞之、為之罷社」となっている。また『全集』本では、避諱により「時」を「世」に改めている。

8．王覽	
全集	護兄感母〔八齊韻〕 晋王祥弟覽、字元通、母朱氏遇祥不慈、覽年四歳、見祥被撻、輙流涕、抱護、及長、朱虐使祥妻、覽妻亦往、祥漸有名譽、朱益悪之乃酖祥、覽知取飲、祥固争之、不與、朱恐覽飲、急傾去、自後毎食、覽必先嘗、坐卧必同處、朱感而悔、愛祥如覽。 兄將被撻弟先啼　　母使兄妻弟使妻 酖酒欣然親去飲　　母心從此醒昏迷
叢刻	護兄感母 晋王祥弟覽、字元通、母朱氏遇祥不慈、覽年四歳、見祥被撻、輙流涕、抱護、及長、朱虐使祥妻、覽妻亦往、祥漸有時譽、朱益悪之乃酖祥、覽知取飲、祥固争之、不與、朱恐覽飲、急傾去、自後毎食、覽必先嘗、坐臥必同處、朱感而悔、愛祥如愛覽。 豈獨全兄孝　　兼能感母慈 乗舟空泛泛　　堪嘆衞風詩
前後	晋王祥弟覽、字元通、母朱氏遇祥不慈、覽年四歳、見祥被撻、輙流涕、抱護、及長、朱虐使祥妻、覽妻亦往、祥漸有時譽、朱益悪之乃酖祥、覽知取飲、祥固争之、不與、朱恐覽飲、急傾去、自後毎食、覽必先嘗、坐臥必同處、朱感而悔、愛祥如愛覽。 豈獨全兄孝　　兼能感母慈 乗舟空泛泛　　堪嘆衞風詩

『全集』本には「祥漸有名譽」、「愛祥如覽」とあるが、『叢刻』本、『前後』本では「祥漸有時譽」、「愛祥如愛覽」となっている。『全集』本では避諱により「時」を「名」に改めている。

9．陶侃	
全集	少違酒約〔九佳韻〕 晉陶侃、每飲酒、有定限。嘗歡有餘、而限已竭、殷**洪**源勸再少進、侃曰、年少辰、曾有酒失、亡親見約、故不敢違、踰限是忘親矣、終不寬飲、按侃、官太尉、封長沙公、謚曰桓。 酒杯有量興無涯　　義訓當前敢自**乖** 踰限忘親纔數語　　醉鄉不覺醒同儕
叢刻	少違酒約 晉陶侃、每飲酒、有定限。嘗歡有餘、而限已竭、殷洪源勸再少進、侃曰、年少時、曾有酒失、亡親見約、故不敢違、踰限是忘親矣、終不寬飲、按侃、官太尉、封長沙公、謚曰桓。 每飲懷難釋　　從前事甚非 友朋休苦勸　　親約不能違
前後	晉陶侃、每飲酒、有定限、常歡有餘、而限已竭、殷洪源勸再少進、侃曰、年少時、曾有酒失、亡親見約、故不敢違、踰限是忘親矣、終不寬飲、按侃、官太尉、封長沙公、謚曰桓。 每飲懷難釋　　從前事甚非 友朋休苦勸　　親約不能違

『全集本』には「殷**洪**源」、「年少辰」とあるが、『叢刻』本、『前後』本には「殷洪源」、「年少時」とある。『全集』本で「時」を「辰」に改め、「洪」を「**洪**」に欠筆しているのはいずれも避諱による。

10．趙景真	
全集	聞耕輟誦〔十灰韻〕 晉趙景真、名至、少辰詣鄉師受業、聞父耕叱牛聲、投書而泣、師怪問之、真曰、我未能養、使老父勞苦、是以泣耳、師奇之、後從嵇中散學、成名儒。 鄉塾驚聞叱犢催　　父勞子逸泣聲哀 名儒事業從何起　　起自當年輟讀來
叢刻	聞耕輟誦 晉趙景眞、名至、少時詣鄉師受業、聞父耕叱牛聲、投書而泣、師怪問之、眞曰、我未能養、使老父勞苦、是以泣耳、師奇之、後從嵇中散學、成名儒。 未克供滌瀡　　猶教老父耕 驚心因輟誦　　忍聽叱牛聲
前後	晉趙景眞、名至、少時詣鄉師受業、聞父耕叱牛聲、投書而泣、師怪問之、真曰、我未能養、使老父勞苦、是以泣耳、師奇之、後從稽中散學、成名儒。 未克供滌瀡　　猶教老父耕 驚心因輟誦　　忍聽叱牛聲

『全集』本には「少辰」とあるが、『叢刻』本、『前後』本は「少時」、「後從稽中散學」としている。『全集』本では避諱により、「時」を「辰」に改めている。『全集』本と『叢刻』本には「後從嵇中散學」とあるが、『前後』本では「後從稽中散學」となっている。

11. 裴秀	
全集	使客敬母〔十一眞韻〕 晋裴秀、母婢妾也。秀年八歳、善詩文、有神童之目、嫡母許、虐待其母、一日宴客、令進饌、座客皆為之起、三揖止之、許於屏後見之、歎曰、微賤如此、而客加禮、殆因秀兒故也、遂優遇焉。 八歳能文共道神　　母因嫡虐饌供賓 偸窺座客皆三揖　　知有佳兒便轉瞋
叢刻	使客敬母 晋裴秀、母婢妾也。秀年八歳、善詩文、有神童之目、嫡母許、虐待其母、一日宴客、令進饌、座客皆為之起、三揖止之、許於屏後見之、歎曰、微賤如此、而客加禮、殆因秀兒故也、遂優遇焉。 膝下佳兒在　　賓朋不敢輕 堂前方肅揖　　屏後有人驚
前後	晋裴秀、母婢妾也、秀年八歳、善詩文、有神童之目、嫡母許、虐待其母、一日宴客、令進饌、座客皆為之起、三揖止之、許於屏後見之、歎曰、微賤如此、而客加禮、殆因秀兒故也、遂優遇焉。 膝下佳兒在　　賓朋不敢輕 堂前方肅揖　　屏後有人驚

『全集』本は『叢刻』本、『前後』本と全く同文である。

12. 韓伯兪	
全集	受杖感親〔十二文韻〕 梁韓伯兪、事親能順、毎有小過、母怒、跪而進杖、苔之亦不泣、一日母苔之、涙下、母曰、他日未嘗泣、今泣何也、對曰、他日苔痛、今母力不能使痛、哀矣、故泣耳、母泫然投杖。 夏楚年年驗骨筋　　涙隨苔下兩紛紛 初来不泣今何泣　　母力從今減數分
叢刻	受杖感親 梁韓伯兪、事親能順、毎有小過、母怒、跪而進杖、苔之亦不泣、一日母苔之、涙下、母曰、他日未嘗泣、今泣何也、對曰、他日苔痛、今母力不能使痛、哀矣、故泣耳、母泫然投杖。 跪受慈親杖　　中情不覺傷 施刑無力處　　兩鬢感蒼蒼
前後	梁韓伯兪、事親能順、毎有小過、母怒、跪而進杖、苔之亦不泣、一日母苔之、涙下、母曰、他日未嘗泣、今泣何也、對曰、他日苔痛、今母力不能使痛、哀矣、故泣耳、母泫然投杖。 跪受慈親杖　　中情不覺傷 施[14] 刑無力處　　兩鬢感蒼蒼

『全集』本は『叢刻』本、『前後』本と全く同文である。

14)「施」の字、原文は欠字であるが、唐碧編『前後孝行録』、(上海文芸出版社、1991年) に収められている「二十四孝別集」により補った。

13. 王鏗	
全集	夢遇慈親〔一先韻〕 齊宜都王鏗、三歳失恃、悲不自勝、及長祈請幽冥、求一夢見、誠心三年、夢一婦人、云是其母、鏗大哭、而覺急問舊辰侍疾諸人、容貌衣服、果如平生。 三歳劬勞忽百年　　一心求夢透黄泉 婦人何處來稱母　　醒問容儀覺果然
叢刻	夢遇慈親 齊宜都王鏗、三歳失恃、悲不自勝、及長祈請幽冥、求一夢見、誠心三年、夢一婦人、云是其母、鏗大哭、而覺急問舊時侍疾諸人、容貌衣服、果如平生。 三歳當衰經　　慈顔記得無 誠心求一見　　夢裏不模糊
前後	齊宜都王鏗、三歳失恃、悲不自勝、及長祈請幽冥、求一夢見、誠心三年、夢一婦人、云是其母、鏗大哭、而覺急問舊時侍疾諸人、容貌衣服、果如平生。 三歳當衰經　　慈顔記得無 誠心求一見　　夢裏不模糊

『全集』本には「舊辰」とあるが、『叢刻』本、『前後』本では「舊時」となっている。『全集』本では避諱により、「時」を「辰」に改めている。

14. 花木蘭	
全集	代父從征〔二簫韻〕 随花木蘭、父弧商邱人、辰若征役父老且病、不征行、為有司所逼、蘭乃束装出門、代父戍邊、一十二年、人不知為女子也、有功、封孝烈將軍。 偶因代父若征徭　　十載邊城聽夜刀 孝烈將軍留姓字　　閨中安得霍嫖姚 〔按漢以票姚名兵官取勁疾之義、前漢霍去病、為票姚校尉、史記作剽姚荀悦、漢紀作票鷂、皆仄聲、唐人詩用票姚率作平聲且改票作嫖、今姑從之、非自我作古也〕
叢刻	代父從征 随花木蘭、父弧商邱人、時若征役父老且病、不征行、為有司所逼、蘭乃束装出門、代父戍邊、一十二年、人不知為女子也、有功、封孝烈將軍。 鐵甲換羅裙　　從征早立勲 名垂隋史上　　孝烈記將軍
前後	随花木蘭、父弧商邱人、時若征役父老且病、不征行、為有司所逼、蘭乃束装出門、代父戍邊、一十二年、人不知為女子也、有功、封孝烈將軍。 鐵甲換羅裙　　從征早立勲 名垂隋史上　　孝烈記將軍

『全集』本には「辰若」とあるが、『叢刻』本、『前後』本では「時若」としている。『全集』本では避諱により、「時」を「辰」に改めている。『全集』本には題詩の後に「嫖姚」の話を解釈する双行注があるが、『叢刻』本、『前後』本にはそれがない。

15. 許法稹	
全集	母病不乳〔三肴韻〕 唐天寶辰滄州、許法稹生未及歳、母病不肯飲乳、慘然有憂色、人咸奇之、會甘露降、旌其門、人呼為半齡孝子。 飲乳如何肯暫抛　　適因母病子心恢〔恢女交切心亂也〕 半齡孝感垂甘露　　帝為旌門煥草茅
叢刻	母病不乳 唐天寶時滄州、許法稹生未及歳、母病不肯飲乳、慘然有憂色、人咸奇之、會甘露降、旌其門、時呼為半齡孝子。 至性從天賦　　人生孝早知 萱幃方寢疾　　兒不敢啼饑
前後	唐天寶時滄州、許法稹生未及歳、母病不肯飲乳、慘然若有憂色、人咸奇之、會甘露降、旌其門、時呼為半齡孝子。 至性從天賦　　人生孝早知 萱幃方寢疾　　兒不敢啼飢

『全集』本には「天寶辰」、「人呼為半齡孝子」とあるが、『叢刻』本、『前後』本では「天寶時」、「時呼為半齡孝子」となっている。『全集』本では避諱により、「時」を「辰」に改めている。『全集』本、『叢刻』本には「慘然有憂色」とあるが、『前後』本では「慘然若有憂色」となっている。また『全集』本の題詩には、「恢」の話を解釈する双行注があるが、他の文献にはそれがない。

16. 王少元	
全集	滴血認骸〔四豪韻〕 唐王少元、父廷宰、隋末、死於亂兵、遺腹生元、甫十歳、問父所在、母告以故、大慟、遂向有司、求屍、辰野中白骨覆壓、或曰、以子血漬而滲者父胔也、元鑱膚滴血閲幾旬、竟獲、為衣衾棺槨葬之。 戦場白骨亂蓬蒿　　滴血兒心切裏毛 十載孩童如此好　　蓼莪曽否詠劬勞
叢刻	滴血認骸 唐王少元、父廷宰、隋末、死於亂兵、遺腹生元、甫十歳、問父所在、母告以故、大慟、遂向有司、求屍、時野中白骨覆壓、或曰、以子血漬而滲者父胔也、元鑱膚滴血閲幾旬、竟獲、為衣衾棺槨葬之。 白骨慘成堆　　風生戦野衣 親骸何處覓　　漬血遍莓苔
前後	唐王少元、父廷宰、隋末、死於亂兵、遺腹生元、甫十歳、問父所在、母告以故、大慟、遂向有司、求屍、時野中白骨覆壓、或曰、以子血漬而滲者父胔也、元鑱膚滴血閲數旬、竟獲、為衣衾棺槨葬之。 白骨慘成堆　　風生戦野哀 親骸何處覓　　漬血遍莓苔

『全集』本には「辰野中白骨覆壓」とあるが、『叢刻』本、『前後』本では「時野中白骨覆壓」となっている。『全集』本では避諱により、「時」を「辰」に改めている。『全集』本、『叢刻』本には「幾旬」とあるが、『前後』本では「數旬」となっている。『全集』本は『前後』より『叢刻』本の方に近い。

17. 包拯	
全集	登第不仕〔五歌韻〕 宋包拯、年少登第、朝廷授以外官、辭曰、臣雙親在堂、願侍養而不在、上以為無吏才也、許歸里、十年後、親没、始仕、决獄如神、仁尊朝、累官至樞密使、卒贈禮部尚書、謚孝肅。 龍圖當日少登科　　報國雙親奈老何 一日三公容易得　　錦衣侍養十年多
叢刻	登第不仕 宋包拯、年少登第、朝廷授以外官、辭曰、臣雙親在堂、願侍養而不在、上以為無吏才也、許歸里、十年後、親歿、始仕、決獄如神、仁宗朝、累官至樞密使、卒贈禮部尚書、謚孝肅。 年少説龍圖　　辭官登籍初 錦衣歸故里　　侍養十年餘
前後	宋包拯、年少登第、朝廷授以外官、辭曰、臣雙親在堂、願侍養而不在、上以為無吏才也、許歸里、十年後、親歿、始仕、決獄如神、仁宗朝、累官至樞密使。卒贈禮部尚書、謚孝肅。 年少説龍圖　　辭官登籍初 錦衣歸故里　　侍養十年餘

『全集』本には「仁尊朝」とあるが、『叢刻』本、『前後』本では「仁宗朝」となっている。『全集』本では避諱により、「宗」を「尊」に改めていることになる。また『全集』本には「親没」、「謚孝肅」とあるが、『叢刻』本、『前後』本では「親歿」、「謚孝肅」となっている。

18. 朱文公	
全集	幼通孝經〔六麻韻〕 宋朱文公、八歳、讀孝經即知大義、戯為註觧、書八字、於其後云、若不知此、便不成人。 孝經註觧一無差　　小學能知大義耶 書後試看標八字　　真儒事業此萌芽
叢刻	幼通孝經 宋朱文公、熹字晦菴、八歳、讀孝經即知大義、戯為註解、書八字、於其後云、若不知此、便不成人。 自幼明倫理　　千秋説晦菴 試看標八字　　那個可無慙
前後	宋朱文公、熹字晦菴、八歳、讀孝經即知大義、戯為註解、書八字、於其後云、若不知此、便不成人。 自幼明倫理　　千秋説晦菴 試看標八字　　那箇可無慙

『叢刻』本、『前後』本には「熹字晦菴」とあるが、『全集』本にはそれがない。

19. 王溥	
全集	朝服侍立〔七陽韻〕 宋王溥、年三十二、拜相、父祚累遷防禦使、朝臣趨走、若於應酬、溥乃朝服侍側、客不安求去、由是車馬漸少、父遂得逸。 門無虚轍應酬忙　　簪笏朝朝立父傍 客去馬車從此少　　高廷頤養覺康彊
叢刻	朝服侍立 宋王溥、年三十二、拜相、父祚累遷防禦使、朝臣趨走、若於應酬、溥乃朝服侍側、客不安求去、由是車馬漸少、父遂得逸。 趨勢多門客　　高堂宴息難 傍無朝服者　　白髪被摧殘
前後	宋王溥、年三十二、拜相、父祚累遷防禦使、朝臣趨走、若於應酬、溥乃朝服侍側、客不安求去、由是車馬漸少、父遂得逸。 趨勢多門客　　高堂宴息難 傍無朝服者　　白髪被摧殘

『全集』本は『叢刻』本、『前後』本と全く同文である。

20. 崔人勇	
全集	叱木成馬〔八庚韻〕 宋崔人勇陜西人、成廣西、聞母病危、大哭失聲、思歸甚急、入一古廟求筮、遇乞食道人、勇問之、道人曰、借汝神馬、三日可到、母聞子歸、病亦頓愈。 邊城聞病哭無聲　　如箭歸心萬里程 古廟道人貽木馬　　三朝可到母神清
叢刻	叱木成馬 宋崔人勇、陜西人、成廣西、聞母病危、大哭失聲、思歸甚急、入一古廟求筮、遇丐食道人、勇問之、道人曰、借汝神馬、三日可到、遂叱木成馬、勇乗之、覺行甚速、果三日到、母聞子歸、病亦頓愈。 母病思歸急　　長塗千里暌 疾行乗木馬　　南渡事同奇
前後	宋崔人勇、陜西人、成廣西、聞母病危、大哭失聲、思歸甚急、入一古廟求筮、遇丐食道人、勇問之、道人曰、借汝神馬、三日可到、遂叱木成馬、勇乗之、覺行甚速、果三日到、母聞子歸、病亦頓愈。 母病思歸急　　長塗千里暌 疾行乗木馬　　南渡事同奇

『全集』本には「遇乞食道人」とあるが、『叢刻』本、『前後』本では「遇丐食道人」となっている。『叢刻』本、『前後』本には「遂叱木成馬」、「勇乗之」、「覺行甚速」、「果三日到」とあるが、『全集』本にはその部分がない。

21. 呉氏	
全集	天賜奇錢〔九青韻〕 宋孀婦呉氏、事姑孝、冬夜、必温衾、不得火以身温、姑老且盲、欲招義兒、婦勸止、緝麻飼蠶、獲錢悉奉姑、嘗炊飯出、姑恐過熟、取置盆中、誤傾穢桶、婦見之、借鄰飯饋姑、汚者、滌蕩蒸食、又盡典所有、置備後事、忽夢白衣婦云、汝事姑勤苦、天與汝一錢、蚤起、果得錢、用畫復有、後無疾終、異香經旬、錢忽失。 衾火温姑婦暫停　　蠶忙飯穢對夫靈 白衣仙女床頭夢　　果得天錢萬選青
叢刻	天賜奇錢 宋都昌孀婦呉氏、無子、事姑孝、冬夜、恐姑寒、必温衾、或不得火輒以身温之、姑老且盲、念呉孤單、欲招一義兒、婦勸止、緝麻飼蠶、獲錢悉奉姑、嘗炊飯鄰婦呼之出、姑恐過熟、取置盆中、而誤傾穢桶、呉見之、亟往鄰家借飯饋姑、姑亦不知、自拈所汚者、汲水滌蕩蒸食、又念姑老設不諱、無由得棺、盡典所有、託鄰人置備後事、一夕忽夢白衣婦人云、汝村婦耳事姑勤苦如此、天與汝一錢、蚤起、牀頭果得錢、越宿得千錢、用畫復有、蓋子母錢也、後婦無疾而終、異香經旬、錢忽失所在。 事姑孀婦苦　　紡績養終年 嘗飯都忘穢　　天憐賜異錢
前後	宋都昌孀婦呉氏、無子、事姑孝、冬夜、恐姑寒、必温衾、或不得火輒以身温之。姑老且盲、念呉孤單、欲招一義兒、婦勸止、緝麻飼蠶、獲錢悉奉姑、嘗炊飯鄰婦呼之出、姑恐過熟、取置盆中、而誤傾穢桶、呉見之、亟往鄰家借飯饋姑、姑亦不知、自拈所汚者、汲水滌蕩蒸食、又念姑老設不諱、無由得棺、盡典所有、託鄰人置備後事、一夕忽夢白衣婦人云、汝村婦耳事姑勤苦如此、天與汝一錢、蚤起、床頭果得錢、越宿得千錢、用畫復有、蓋子母錢也、後婦無疾而終、異香經旬、錢忽失所在。 事姑孀婦苦　　紡績養終年 嘗飯都忘穢　　天憐賜異錢

『全集』本には「不得火以身温」、「義兒」、「嘗炊飯出」、「誤傾穢桶」、「借鄰飯饋姑」、「婦見之」、「汚者」、「滌蕩蒸食」、「忽夢白衣婦云」、「汝事姑勤苦」、「果得錢」、「後無疾終」、「錢忽失」とあるが、『叢刻』本、『前後』本では「或不得火輒以身温之」、「一義兒」、「嘗炊飯鄰婦呼之出」、「而誤傾穢桶」、「亟往鄰家借飯饋」、「呉見之」、「自拈所汚者」、「汲水滌蕩蒸食」、「一夕忽夢白衣婦人云」「汝村婦耳事姑勤苦如此」、「牀頭果得錢」、「後婦無疾而終」、「錢忽失所在」となっている。また『叢刻』本、『前後』本には「都昌」、「無子」、「恐姑寒」、「念呉孤單」、「姑亦不知」、「念姑老設不諱、無由得棺」、「託鄰人」、「越宿得千錢」、「蓋子母錢也」とあるが、『全集』本にはその部分がない。

22. 徐積	
全集	踐地避石〔十蒸韻〕 宋徐積、事親甚敬、嘗客外、父書至必跪讀、人笑之、曰吾學顧愷耳、君命至且跪、奈何父不如君耶、及父没、以父諱石、終身不用石器、遇石路、亦避而不踐云。 父書跪讀敬彌增　　戲笑誰知顧愷曾 遇石更因親諱避　　始終一節幾人能
叢刻	踐地避石 宋徐積、事親甚敬、嘗客外、父書至必跪讀、人笑之、曰吾學顧愷耳、君命至且跪、奈何父不如君耶、及父歿、以父諱石、終身不用石器、遇石路、亦避而不踐云。 遇石如親在　　悽然悲感増 莫將愚孝看　　終古幾人能

前後	宋徐積、事親甚敬、嘗客外、父書至必跪讀、人笑之、曰吾學顧愷耳、君命至且跪、奈何父不如君耶、及父歿、以父諱石、終身不用石器、遇石路、亦避而不踐云。 遇石如親在　　悽然悲感增 莫將愚孝看　　終古幾人能

『全集』本は『叢刻』本、『前後』本と同文である。

23. 祝公榮	
全集	伏柩滅火〔十一尤韻〕 元麗水祝公榮、字大昌、隱居養親、及母故、柩在堂、鄰家失火、榮力不能救、大慟伏柩呼曰、老母奈何、願與俱焚、忽大雨如注、火滅、至元十五年八月二十一日事也。 城火池魚不自由　　母棺在殯子無謀 俱焚數語篤天聽　　一雨滂沱寫我憂
叢刻	伏柩滅火 元麗水祝公榮、字大昌、隱居養親、及母故、柩在堂、鄰家失火、榮力不能救、大慟伏柩呼曰、老母奈何、願與俱焚、忽大雨如注、火滅、至元十五年八月二十一日事也。 烈火鄰家逼　　移棺勢大難 伏號身願并　　一雨賜平安
前後	元麗水祝公榮、字大昌、隱居養親、及母故、柩在堂、鄰家失火、榮力不能救、大慟、伏柩呼曰、老母奈何、願與俱焚、忽大雨如注、火滅、至元十五年八月二十一日事也。 烈火鄰家逼　　移棺勢大難 伏號身願并　　一雨賜平安

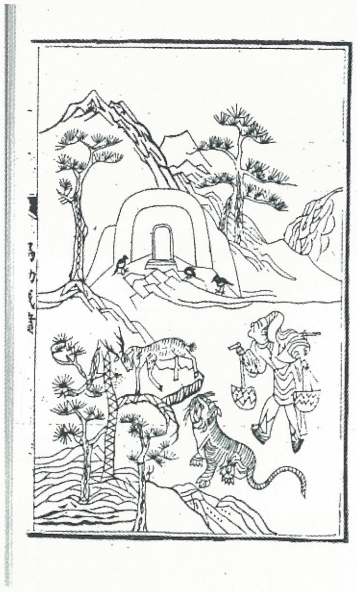
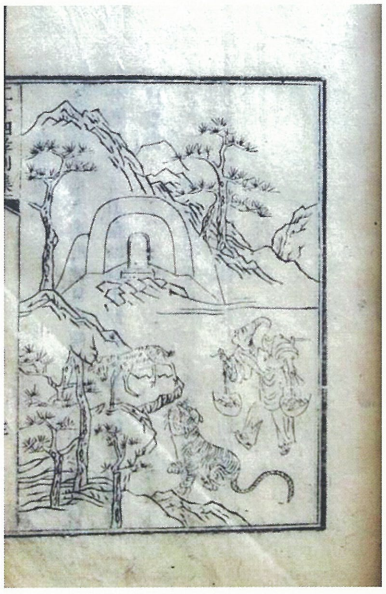
『全集』本は『叢刻』本、『前後』本と全く同文である。

24. 楊士奇	
全集	私祭木主〔十二侵韻〕 明楊士奇、微辰、父亡母改適、士奇隨往、母祭先、不令士奇拜、奇怪而問母、母告以故、奇方六歳、悽□不已、乃私置木主、祀於卧室、早晩焚香拜跪、遇有新物必薦、後官至少師、拜𡨋盖殿大學士、謚文貞。 醮母供先不許臨　　偶聞慈誨動兒心 私藏木主□□六　　早晩焚香禮意深
叢刻	私祭木主 明楊士奇、微時、父亡母改適、士奇隨往、母祭先、不令士奇拜、奇怪而問母、母告以故、奇方六歳、悽悽不已、乃私置木主、祀於臥室、早晩焚香拜跪、遇時物必薦、後官至少師、拜華蓋殿大學士、謚曰文貞。 早晩暗焚香　　斯人本不忘 異時迎木主　　大祫共烝嘗
前後	明楊士奇、微時、父亡母改適、士奇隨往、母祭先、不令士奇拜、奇怪而問母、母告以故、奇方六歳、悽悽不已、乃私置木主、祀於卧室、早晩焚香拜跪、遇時物必薦、後官至少師、拜華蓋殿大學士、謚曰文貞。 早晩暗焚香　　斯人本不忘 異時迎木主　　大祫共烝嘗

『全集』本には「微辰」、「遇有新物必薦」、「謚文貞」とあるが、『叢刻』本、『前後』本では「微時」、「遇時物必薦」、「謚曰文貞」となっている。『全集』本には「拜𡨋盖殿大學士」とあるが、『叢刻』本には「拜華蓋殿大學士」とあり、『前後』本では「拜華蓋殿大學士」となっている。『全集』本では避諱により、「華」を「𡨋」に欠筆している。

3．図版の考察

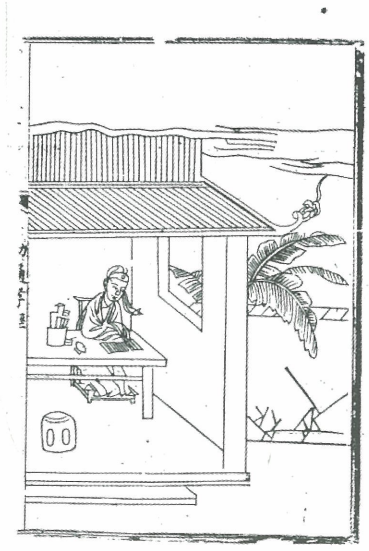
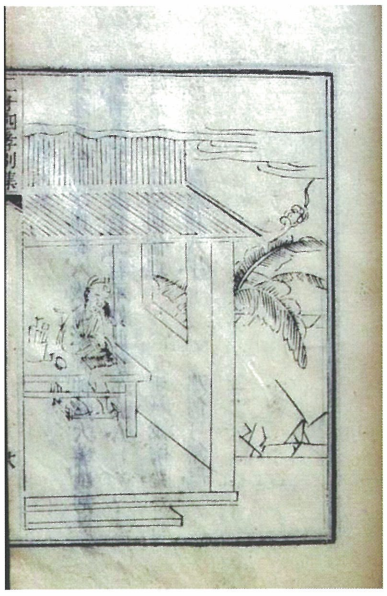
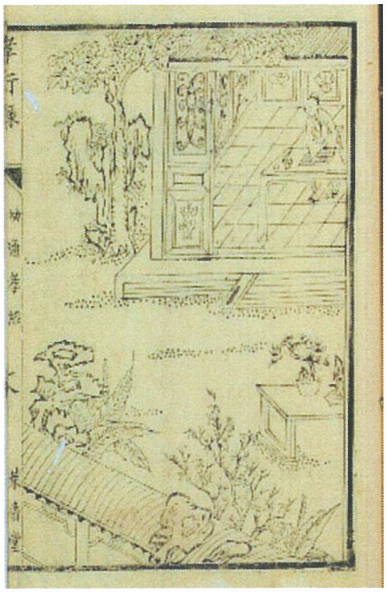
次に、図版について見てみよう。『全集』本は『前後』本と同様に、版心に「寝門三朝」などの標題が記されているが、『叢刻』本にはそれがない。見比べればわかるように、全体として『全集』本の図版が『叢刻』本を参考にして描かれたことは間違いない。しかし、『全集』本および『叢刻』本を細かく考察すると、ところどころに違いがある。一方、『前後』本は、両文献のそれとは異なる図版を収載している。本節では『全集』本と『叢刻』本と異なっている図版のみをとり上げて比較検証してみる。

3．顔鳥		
『全集』	『叢刻』	『前後』
		

『全集』本では、墓の前にいる三匹の鳥の姿、地面の部分が『叢刻』本とやや異なっている。鳥は「銜土助之」、すなわち土を運んでお墓を築くことを手伝った動物としてこの説話に登場するため、新たに加筆したのであろう。

6．李餘		
『全集』	『叢刻』	『前後』

『全集』本の図の配置は『叢刻』本と左右が逆になっている。

18. 朱文公		
『全集』	『叢刻』	『前後』
		

『全集』本の図では朱文公机の手前に腰掛けを描いているが、『叢刻』本には見られない。

19. 王溥		
『全集』	『叢刻』	『前後』

『全集』本を『叢刻』と比較すると、玄関の模様、手前の木や柱のところにやや相違がある。

おわりに

以上のように、ベトナムにおける『全集』本所収の「二十四孝別集」の孝子の順序は、『叢刻』本所収の「二十四孝別集」、および『前後』本所収の「二十四孝別録」と一致するが、本文を比較すると、『全集』本の「二十四孝別集」は『前後』本よりも『叢刻』本と一致する点が多い。そして、『全集』本所収の「二十四孝別集」は説話のあらすじを守りつつ、孝子の字、「孔子弟子」などの語といった細かい部分を省略する傾向があり、阮朝の紹治帝、嗣徳帝の避諱のため、文字の省略、文字の改変、欠筆という三つの書法を用いている。換言すれば、『全集』本は『叢刻』本に比べて記述がやや簡略化されているのであり、変遷、変容があるが、全体によく類似しており、『叢刻』本が、『全集』本「二十四孝別集」の底本になったことは明らかである。

一方、図版の場合、『全集』本所収の「二十四孝別集」の図は、『前後』本とはまったく異なっている。しかし、『全集』本を『叢刻』本と比較すると、一部改変を加えているところもあるが、全体的に見れば類似しており、かなり忠実な覆刻になっているといえる。また、「二十四孝別集」の3「顔鳥」および18「朱文公」では新たに鳥や椅子描き加えられているが、それらは当該説話のストーリーをより明確にするためになされたものであった。中国の底本にもとづきつつ、よりすぐれたテキストを作ろうとする鄧輝燿の意図をうかがうことができよう。